スターダストシュート

DEG

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スターダストシュート

【Ｎコード】
Ｎ４９１４Ｏ

【作者名】
ＤＥＧ

【あらすじ】
広すぎる夜空を見上げてしまうのが彼女の癖。遠く遠すぎたあの宇宙に、彼女は何を見ているのでしょうか。

（前書き）

ミクである必要がない話ですが、題材として思い当たったのが彼女でした。多少文学的ですが、読みやすいとは思います。

宇宙が見える星には朝日の見える時間がなかった。上を見上げると、赤から青へかけて様々な色が、カンバスに馴染んだように黒い空にしっとりと流れている。そしてその中には、不思議な幻想を抱かせるピカピカとした星が無数に漂っているのだ。

そんな夜空（夜という概念もそこには存在しないのだが）をぼんやりと眺めてしまうのが、彼女の特有の癖であり、彼女を悩ませる原因であった。ちょうどその日は、この星から新たな出立者達が“帰らぬ旅”に出る日であった。

宇宙全体に響き渡りそうな轟音と共に、巨大なシャトルがあの広い夜空に向かって飛び上がっていく。白い煙が噴き上がり、地上のものを吹き飛ばしながら、彼女の仲間だった者達が旅立っていく。

彼女は吹き荒される両くくりの翡翠色の髪を直すこともせず、ただじっと、無数の星に紛れてしまった箱舟の光を追っていた。それはとても美しい輝きであり、同時にひどく儚い輝きでもあった。

「私はアースって星に行きたいの。すごくおっきな水溜まりがあってね、“海”っていうらしいよ」

「そんな星ホントにあるの？」

「もちろん。この前映像を見たけど、とっても綺麗だったんだよ！」

彼女は彼女の生まれ育った施設を歩きながら、無邪気に夢を語り合う仲間達とすれ違った。仲間達は彼女とほとんど変わらぬ姿で、長い両くくりの髪を垂らした小さな人間の少女の外見を持っていた。彼女らの服装も全く同じで、痛み朽ちることのない特殊な素材で出来た服も彼女らの象徴だった。

それでも、彼女らは一人一人がはっきりとした自我を持っていた。ただしそれは精神のアイデンティティであって、彼女らの思考回路は外見による個々の規程をしなかった。とにかく、そんな映し似人形の一人である彼女は、生き生きとした表情をした他の仲間達と違って、まるで住み慣れた街で迷子にでもなったように虚ろな眼をしていたのだ。

彼女はトボトボとした様子で白い無機質な施設を歩き続け、いつしか施設の端っこまで出てきていた。すぐそこが施設の出口となっているため、仲間達がその狭間にやってくることはまずなかった。

だから、外の岩陰に何者かの姿を認識した時には彼女は少し驚いた。この星は彼女の知る限り、ごつごつした黒い岩以外、植物の一つすら生えていないつまらない場所だ。だから彼女のような物好き以外の仲間達は、基本的にもっぱら施設の中で、外の星に関するあらゆる知識や興味を拡げることに夢中なのである。

だが彼女がその人影に妙に気を奪われたのはそれだけが理由ではなかった。その人影はやはり彼女と寸分違わぬ同じ特徴をしていたが、不思議に彼女より大人びた雰囲気を纏っている気がした。顔立ちも少し違っていた。その人は、遠い目であの深すぎる夜空を見上げながら、ほとんど聞き取れない小さな声で何か口ずさんでいた。否、それは確かに歌声だった。

実は彼女は、何かの気配に惹かれるようにその場所にやってきたのだ。その導きの正体が目の前にいる人物の声だと思い、彼女は歩み寄っていった。

「――あの……あなたが唄ってたの？」

声を掛けられた人はふっと口を閉ざし、細い目線を彼女の方へ移した。

「そうよ。私達は唄うのが仕事だもの。あなたもミクなら同じでしょう？」

その人は随分と、不自然なくらい穏やかに答えてくれた。

「あなたもミクなの？」

「えぇもちろん。声も同じじゃないの」

ミクはわずかに笑いながら言う。

「こんなところにわざわざ来るなんて変なコね。どうしてここへ来たの？」

「うぅん……なんとなく。あなたの声が聞こえたから」

「そう。私の声を聞いてくれたなら、あなたは私のお友達ね」

そのミクは今度ははっきりとした笑顔を彼女に向けた。何かに濁り気を奪われたような純粋過ぎるミクの笑顔は、彼女には妙なものにすら思えた。

「浮かない顔ね。何か悩み事？」

「……悩み、じゃないんだけど」

尋ねられた彼女は、反射的に例の夜空を見上げる。

「お友達が行ってしまったの？」

「うん……みんな」

彼女は、生まれた時から仲の良かった同胞を何人も持っていた。だが巣箱から飛び立ち華やかな未来を期待していた彼らは、運命づけられていたかのように一人、また一人とあの未知の夜空に旅立っていった。取り残された最後の一人に、何か捉えようのない虚空感を与えて。

「仕方ないわよ。私たちはそういう風に生み出されたんだもの。あなただってあそこに行きたいんじゃない？」

彼女は首を縦にも横にも振らなかった。そう、それが彼女が、無意味に夜空の星を眺めてしまう理由なのだ。

「初めは私も綺麗な星がいっぱいあると思ってた。だからたくさん歌を練習したの。いつかこの星から旅立つために」

ミクは黙って彼女の言葉を聞いていた。

「みんな私より歌が上手なミクだった。だから私より先に選ばれて、どんどんあの空に消えていったの。みんなみんな……」

「そう……」

「それで、気づいたら段々歌がうたえなくなってたの。最初の頃みたいに、遠い星にも届くような歌をうたいたくなくなっちゃったの。このままだったら私……」

「そうね。能力の低いミクはこの星で廃棄処分されるわね。外の世界で寿命が来るよりも早く」

彼女は困惑しながら吐き出したが、ミクは静かな空気を淀ませぬまま問い返した。

「あなたの歌を聞かせてくれない？」

「……でも」

「いいから。聞いてみないとわからないでしょう？」

ミクにそう言われ、戸惑いながらも彼女は口を開いた。だが彼女は自身の歌に全く自信が持てなかった。

彼女の歌は他の優秀なミク達と違って、言うならばひどく地味であった。まるで、ただ誰かと他愛ない話をすることだけで満足しているような人の素直さ、そして欠陥があった。そこには彼女の迷いも混じっており、ぎこちない響きが続いた。それでも、ミクは彼女の歌に聴き入るようにして目を閉じていた。

「とてもいい歌ね。いい声じゃない。私は好きよ」

「……」

歌い終えた彼女は黙り込んだままだった。ミクの言葉を素直に受け取れなかった。まだ、彼女の中には依然として粘着質な欠陥が残っていたからだ。

「足りないのね？　わかるわ。あなたの魂はもっと大きな世界を求めてるのね」

「魂……？」

ミクは「そう」と頷くと、立ち上がって彼女の傍まできた。そして彼女の瞳の奥を真っすぐに見据えた。

「魂はね、どうしようもなく外へ外へ解放されたがるの。だから私の魂も叫んでいるのよ。ここから出たい、って」

「え？」

彼女にはミクの言うことがわからなかった。

「私は魂をこの星に縛られているの。私はあなたたちの最初の私。ミクのプロトタイプだから」

彼女は驚いて最初の自分の姿を見つめ直した。わずかに差のある外見も、彼女が最初の機体だったからであった。

「あなたたちミクは私を基に再設計された、派生形態なの。でもプロトタイプはこの星から出られないのよ。永遠にたった一人で、この黒い星で生き続けなきゃならないの」

ミクの眼はその時になって、秘めていたとてつもないさびしさを顕わにしていた。理性を狂わせる広い大宇宙に、本当にただ一人残された人間の究極の孤独を知っている暗さであった。

「言うなればここはごみ箱なのよ。星になれなかった私達のような存在が残る場所。誰にも知られず、ただの鉄クズになっていく場所なの。そんなの怖いと思わない？」

それを聞いた彼女は、怖いと思った。鉄クズになってしまうことより、決して離れることを許さないようなミクの視線が恐ろしくなり、なのに彼女は目を逸らすことができない。

と、ミクはふっと表情を穏やかなものに戻し、彼女の頬をそっと撫でた。

「……変なこと言っちゃったわね。気にしないで。あなたを引き留めるつもりじゃなかったの」

優しく触れられた手はひどく冷たく感じられた。彼女から離れたミクはまた近くの岩場に腰を下ろした。

「『初音未来（ミク）』っていうのが私達の本当の名前だって、知ってた？」

「未来（ミク）？」

「そう。未来からの初めての音。それが名付けの由来よ。どういう意味かわかる？」

彼女はふるふると首を横に振る。するとミクは自嘲するかのような

笑みを浮かべて言った。

「未来は発展の証よ。私達は常に進化した新しい未来でなければならないの。膨張し続ける宇宙のように、世界に向上をもたらし続けるためにね」

くっくっ、というミクの笑い声は内から響く不気味さを増した。

「終わりなき向上を必然づけられて、それを成し遂げた存在だけが未来のミクになれるのよ。皮肉でしょう？　初めて未来として生み出されたプロトタイプは、決して華やかな未来を形作ることはできないの。私は本当はミクじゃないのよ」

だだっ広い黒い空の下で、原初のミクは何の存在価値も見出だされない黒い岩のように薄い色をしていた。

「だから……あなたはあなたの魂に従いなさい。虚空に目を奪われた連中と違ってあなたの魂はまだ腐っていない。宇宙はまだあなたを受け入れてくれるわ」

ミクはそう言って微笑んで見せた。さびしさを交えた、宇宙の静寂が伝わってくるような澄んだ笑顔だった。彼女は何も言えなかった。言うべき言葉がなかった。

――彼女がミクと出会ってしばらくした後、彼女はとうとう“永遠の旅行者”の一人として選ばれた。

彼女はあのあと、自分の中にけぶっていた靄を払うように、自身の

魂を探し出すようにして再び歌を唄いはじめていた。イライラとすることもあったし、何も悩むことなく未来を追いつづける仲間を見ると、またわけがわからなくなることもあった。

あの空は変わりなく、果てしない大きさで彼女を包んでいる。いや、彼女は既に宇宙の一部であるはずなのだ。それなのに、小さく流れている綺麗な星々には、もう二度と会えないほどに離れてしまった仲間がいる。見上げることしかできない、彼女の存在が完全に無関係となってしまう距離。

なぜみんなあそこへ行こうとするのか。なぜ私はあそこへ行こうとしているのか。何かが変わるからではない。そう、魂がただそう命ずるから。

「……」

遠く遠く。もっと高みへ。もっと大きな世界へ。果てしない宇宙の果ては決してたどり着くものではないのに、どうしても目指さずにはいられない。彼女が夜空を眺めつづけていたのは、彼女の魂が確かに、電子頭脳にすら計測不能な世界を知ることを欲していたからだった。

目的や理由などどうだっていい。ただまだ見ぬ未来に、全てを創造するために彼女らは旅立っていくのだ。歌を唄うという存在意義と共に。

それがわかっても、彼女は相変わらずべっとりした夜空を見上げていた。その瞳には、小さな迷いが今だ残りつづけていた。

ふと思い出す、プロトタイプが見せた最後の顔。それはまるで意思

なき意志のごとく、彼女をこの星に引き留める。無限の彼方へ消え行く者を、まるで名残惜しむように見送りつづける。

来たる日、彼女はいよいよ無限空間への旅行者の一列に加わった。ミク達の表情は未知に対するわずかばかりの恐怖と、その裏にある可能性に対する大いな希望に満ちている。

彼女も今となっては、これから目にするであろう世界に期待していた。しかし、それは決定的な決意ではなかった。

各々が無機質な色をしたシャトルへと促される中、彼女はふとガラス越しに外の景色に目をやった。見えるのはどこまでも同じ、黒い氷のようにぬっぺりとした冷たい岩肌の星。

「……！」

その中にぽつりと、まるで景色の一部に溶け込んだようにして立っていたのは、あのプロトタイプのミクだった。瞬間、彼女の意志が打ち鳴らされたように揺れ響く。

プロトタイプは、以前と変わらぬ人形のような顔で箱舟に向かうミク達をただじっと見送っていた。ふと、プロトタイプと彼女の目が合う。

プロトタイプは、遥か地上で柔らかく手を振った。全てを受け入れ、そして諦め、ミクは去り行く何もかもを、憂いを帯びた目で見送る。

そしてミクはほんの小さく歌いはじめていた。彼女が初めて聴いた

時と同じ、いやそれ以上にか細く、歌というよりはただ、宇宙の流れそのものに身を任せて声を響かせているだけのような、実に弱々しい声だ。

誰の耳にも届くはずのない初めの音はしかし、彼女がはっきりと聞いていた。そして気づいたのだ。

「――忘れないから！！」

シャトルから飛び出した彼女は、眼下に向かって叫んだ。

あのプロトタイプは名残惜しさから歌っているのではない。死にそうな淋しさを紛らわすために声を上げているのでもない。

「あなたがうたってくれるなら、私は絶対にあなたのこと忘れない！　どんなに――どんなに離れてたってあなたの声を覚えてるから！」

それは、暗闇に浮かぶ星の輝きと同じだ。ミクはただ確かに存在しようとするために、誰かに想いを届けるのだ。たとえそれが何万光年の距離だろうと、永遠に広がっていく距離であろうと。

プロトタイプは彼女の声を受け取ると、穏やかに瞳を細めた。

「……私も忘れないわ。あなたのこと。ずっとずっと」

二人のミクの表情はもう虚しさを伴ってはいなかった。永遠に届かない夜空を見続けるように、しかし彼女らは、静かに互いを見送った。

シャトルの発射合図が鳴り、プロトタイプの歌はまるで無感情な鉄の塊が吐き散らす音に押し潰される。

そして――彼女の脚は最期の一歩を踏み出した。

広い夜空、広すぎる夜空。ミクを乗せた舟は、地上のあらゆるものを吹き飛ばし、上へと登りつづける以外に不必要な全てを捨て去り、置き去りにしていく。

その世界では時の流れは意味を成さない。計り知れない距離など無いに等しい。全てが繋がっていて、彼女らの魂は結ばれ続けるからだ。重力を振り切り、宇宙の果てすら超えて。どこまでも、どこまでも。

彼女はふと、あの帰らぬ星の影を振り返る。

真っ黒だったはずの故郷、哀しく冷たかったはずの惑星が、とても温かい光に包まれて、彼女を見守ってくれているような気がした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4914o/

スターダストシュート

2010年10月25日05時29分発行